

## グラントワとの歩み

### 文化事業課

菊屋典子

あけましておめでとうございます、文化事業課の菊屋です。ここで何を書こうか、思いあぐねていたのですが、そういえば早いもので私がグラントワで働き始めて今年で7年目になります。自分語りになってしまいますが、これまでグラントワでどの様に過ごしてきたか書かせていただきます。

ちょうど元号が平成から令和に変わるときに入職し、最初の2年は石見美術館の学芸課で学芸補助として勤務しました。初出勤の緊張でドキドキソワソワしながら、菅官房長官が令和の文字を掲げるのを学芸室のテレビで見ているのを覚えてます。しばらくは秋市の実家から車通勤しており、毎日違った風景を見せてくれる日本海を眺めながらのしく通っておりまして。が、やはり距離の行き帰りは大変で、出発した瞬間に釘を踏んでタイヤがパンクし、あわてて車で移動して遅刻するなどのハプニ

ングも経験して、数か月で益田に引っ越しました。

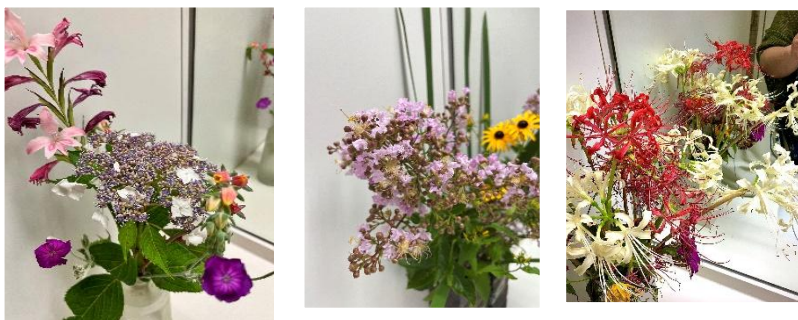
大学では美術史を専攻していたのですが、学芸課では、学校の講義や実習だけでは得難い、作品と長い時間をかけて身近にかかわるといふ貴重な経験が出来ました。特に思い出深いのは、森英恵さん・澄川喜一さんという石見にゆかりある方々の作品に触れられたことです。森英恵さんの「ジャンプ・スーツ、カフタン」(皆さんもご覧になったことがあるか)と思います。ミュージアムパスポートのデザインにもなっている、鮮やかなピンク地に白の秋草がプリントされたドレスです)の展示をサポートした際は、丈が長く繊細なこのドレスを美しく展示するために、収納・保管・マネキンへの着せつけにいたるまで、細かな工夫や心配りがされていることを

知りました。また、澄川先生とは生前、益田に來られた際に食事をご一緒したり、清瀬のアトリエへ伺って作品調査をさせていただきました。私のぶしつけな質問にも快く答えてくださり、幼少期の島根での暮らし、作品制作への姿勢、木材や石など彫刻の素材との向きあい、かた、設立時から現在にいたるまでのグラントワへの想いなどを直接お聞きすることができました。

学芸課の次の1年は、いわみ芸術劇場の総務広報課に移り、貸館窓口での業務に携わりました。ご存じのとおり、グラントワは美術館と劇場がひとつになった複合施設ですが、ホール・スタジオ等を活用した貸館事業も行い、公演や会議など県民の皆様幅広い形で利用いただいています。ですので、学芸課にいた時よりも、日々グラントワの外部の人と接する機会が圧倒的に増え、接遇について多くを学ぶことができました。

そこから今度は劇場の文化事業課に移って約3年経ち、合唱や邦楽、演劇、伝統芸能、交響楽団やビッグバンドの公演など、短い間に様々なジャンルの事業を担当いたしました。どの事業でも、グラントワ応援団をはじめ県内外の多くの皆様をご鑑賞くださり、

いわみ芸術劇場を盛り上げていただきましたし、運営面では、ボランティアの方々がたくさんのお力添えをいただきました。令和7年度、当館は開館20周年を迎え、美術館・劇場ともに、記念となる様々な企画を準備しているところです。皆様と一緒にグラントワをもっともっと楽しい場所に出来たらと思っています。本年もどうぞ、よろしくお願いいたします。



画像キャプション：  
ボランティア（生花グループ）の皆さんがトイレに活かしてくださる四季折々のお花シリーズ。  
きれいなので時々撮影しています。

## 美術館と出会い直す

島根県立石見美術館

学芸員 大谷 姫歌

昨年四月より、島根県立石見美術館の学芸員となりました、大谷姫歌と申します。年も明け、益田へ移り住んでから早くも九か月が経ちました。慣れないことばかりの毎日ですが、周囲の方々にサポートしていただきながら日々の仕事に取り組んでいるところです。

私は高校卒業までを広島市で過ごしたのち、北関東の大学・大学院に進学しました。父親が出雲市で長く働いていたこともあり、島根県は私にとって身近な場所ではありましたが、益田市、そしてグラントワを初めて訪れたのは採用試験を目前に控えた一昨年の夏でした。空港からバスに揺られていると突如として赤い瓦で覆われた巨大な建物が現れた驚きと、建物内に足を踏み入れた時の静謐な空気に圧倒された私は、美術館に入る前から「ここで働くことができたらどんなに良いだろう」と心躍る思いでした。開催されていた「山本栞谷と津和野藩の絵師たち」展は、津和野藩で活躍した絵師たちの仕事を掘りおこすものでした。タイミングよく石見地方に根差し

た展示を鑑賞することができ、ここで働きたいという気持ちを一層強めたのを覚えています。

採用試験を経て、運よく石見美術館の一員となった私にまず課せられたのは、グラントワについてより深く知ることでした。具体的には、このような巨大な施設が人々のどのような思いで計画され、どんな困難を乗り越えて出来上がったのかという物語を、建物が建つ前を知る先輩学芸員から丁寧に教わりました。また、計画当初から現在に至るまでのグラントワに関する資料をじっくりと読み込む機会にも恵まれました。

こうした経験のもと、ここで九か月を過ごした現在の私が「山本栞谷と津和野藩の絵師たち」展を見たら、一体どのような感想を抱くのだろうかと考えることがあります。当時も強く心を動かされた展示でしたが、島根県西部の町の文化史の一端を丁寧に紐解いた本展を、以前とはまた異なる視点から鑑賞し、理解することが出来るはずだと思っております。

全国の美術館を何度も訪れていると、同じ美術館であっても前回の訪問とは全く異なる印象を受けることがあります。それは、作品の展示替えに

依る変化である場合もあれば、私自身の体調、年齢や考え方の成長がもたらした変化であることもあります。後者の場合、時には同じ作品を目にしている、前に見た時とは正反対の印象を受けることがあり、これは私が思う美術館の醍醐味のうちの一つです。今年で二十周年を迎えるグラントワ。私の初担当展も控えています。初めてグラントワを訪れる方は勿論、ここまでグラントワを支えてこられた皆様、初来館での出会いとはまた異なる気持ちで美術館と出会い直すことが出来るような展示を目指しています。最後になりましたが、本年もどうぞよろしく願いいたします。



「新年のグラントワ」

ポランティア会では

「10月にフリマを開催。」

陶器やガラス食器類をメインに、手作りのアクセサリーや植物を販売。

来客層はファミリーが多く、可愛い物は人気で小さな女の子達は、アクセサリーに興味を持ち、お手頃価格もあって購

入。お昼前になると来館者がピークに達し、コチラも気合いを入れて全品50%OFFで販売。すると品定めをするお客様が増え始めました。他店と比べると人気はイマイチ。半分くらいは売れたかな。来年は20周年。お子様が楽しめる企画で盛り上げたいと反省し、フリマ終了。次回も頑張るぞ・・・！

イベントポランティアリーダー  
野村友子

## あ と が き

今年、2025年・令和7年・グラントワ開館20周年記念の年。昨年11月にはグラントワポランティア会の研修会があり、13名参加。松江市「さんびる文化センター プラバホール」での研修で「パイプオルガンの演奏」を聴く。ホール全体が楽器となつて素晴らしい音色に感動した。

新年1月7日（火）雪のちらつく日。グラントワは美術館休館日で静かなたはずまい。廊下を一人で歩いているとガラス窓がすべてスリガラス状態で曇り、一カ所だけ不思議と透明な窓ガラスがあり、そこで中庭の写真を撮った。本年もよろしく申し上げます。

情報発信ポランティア

浅川光廣